

第25回日本26聖人巡礼ウォーク（尾道→三原）

交 通

●行き料金 2710 円

高松→7:44/マリンライナー/8:46→岡山→8:54/山陽本線/10:08→尾道

●帰り料金 3130 円

三原→16:58/山陽本線/18:29→岡山→18:34/マリンライナー/19:28→高松（予定）

概 略

- ◇ 尾道～三原間は約 13km
- ◇ 出発点から約 12km の地点に三原教会
- ◇ 三原教会で記念ミサ後、三原駅まで巡礼を続け、駅前を終点として帰途に

日 程

●徒歩グループ（尾道から巡礼）

- ◇ 尾道駅から出発点までの移動があるため出発は 10:30 ころ
- ◇ 食事する店がなさそうなので、三原教会でのミサまで断食（26 聖人の祝日ですし）。
- ◇ 14:30 前後に三原教会到着。

●三原教会直行グループ（三原教会→三原駅のみ巡礼）

- ◇ 三原駅から三原教会までは 1km 徒歩約 15 分。
徒歩グループの到着（14:30 前後）ころに三原教会へ。
- ◇ 交通（例）
 - 高松→10:52/マリンライナー/11:45→岡山→11:56/サンライナー/12:29→笠岡→12:32/シティライナー/13:20→三原
 - 高松→11:22/マリンライナー/12:15→岡山→12:32/山陽本線/14:02→三原

●共通

- ◇ 三原教会で合流し、記念ミサ
- ◇ ミサ後、三原駅まで巡礼。食事後、三原城のトマス小崎像を訪ね、帰途につく。

携 行 品

- ◇ ロザリオの他、各人の健康状態・天候等にあわせ適宜の準備。

資 料

1587 年、日本 26 聖人は京都で捕らえられ、長崎まで連行される途中三原に泊まりました。殉教後、父ミゲル小崎の胸の中に血に染まった一通の手紙が発見されました。少年トマスから母へあてたもので、「安芸国三原城にて」としたためてありました。三原城船入櫓跡にトマス少年の像と記念碑が建っています。（広島教区 HP から）

母マルタに宛てたトマスの手紙

み主のがらさを蒙ってこの手紙を認（したた）めます。

ばあでれと全二十四名は吾らの先頭に掲げた宣告文通り長崎でハリツケにされるためここまで参りました。私のこともミゲル父上のことも御心配下さいませんよう。

ばらいぞ（天国）で母上と直ぐに御会い出来るものと期待しています。たとえばあでれが居られなくとも臨終には熱心に罪科（つみとが）を悔い改め、ぜずゝきりしとの幾多の慈悲を願うならば救われます。この世ははかないものでありますから、ばらいぞの完き幸を失わないよう努力されますよう。

人から受ける如何なる事柄に対しても耐え忍び、すべてのものに慈悲を垂れられますよう御心掛け下さいませ。私の二人の弟マンシオとフェリツペをぜんちよ（異教徒）の手に渡さないよう御尽力下さいませ。私は母上のことを吾らの主にお願ひ致します。母上から私の知っている人々によろしく申上げて下さい。罪科を悔悟することを忘れないよう重ねてお願い致します。母上に大切なことはそれだけですから。アダムはでうすに反いて罪を犯しましたが、それを悔い改め、ぺに・んしや（償い）をしたので救われました。十月二日安芸国ミノラ（三原）城から。

トマスの処刑される場面は次のようであった

役人が四人の刑吏を呼んだ。彼らは槍を持ち二人ずつ一組になって十字架の両端に分かれて行った。

東の方、一番の十字架と、西の端、二十六番目の十字架との下にそれぞれ槍を構えて立った。槍の鞘がはらわれたとき殉教者たちも、群衆も一斉に「ゼズス・マリア」と叫んだ。

かくて一番の十字架上では大工のフランシスコが、二十六番の十字架ではパウロ鈴木が、それぞれ左右の腋下からX形に槍をうけて絶命した。刑吏は柱から柱へと槍をひらめかして行った。鮮血がほとばしる毎に群衆のどよめきがこだました。いまの県庁があった教会でペドロ・マルチンス司教は遙かに刑場を眺めながら、このどよめきを聞いていた。司教は殉教地に行く許可を頼んだが許されず、心ならずも遠くここから殉教者たちの臨終に立ち会っていたのである。

十二歳の少年ルドビコは槍を受けたとき「天国、天国（パライス、パライス）」とつぶやいて目を天に向けながら息絶えた。トマス小崎少年の十字架は二十番で父ミゲルは四番であったから東西に離れていたけれども、殆ど同じころ槍を受けた。

（リバデネイラによれば午前十時から十一時ごろであった）

※引用資料（片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』時事出版社）

